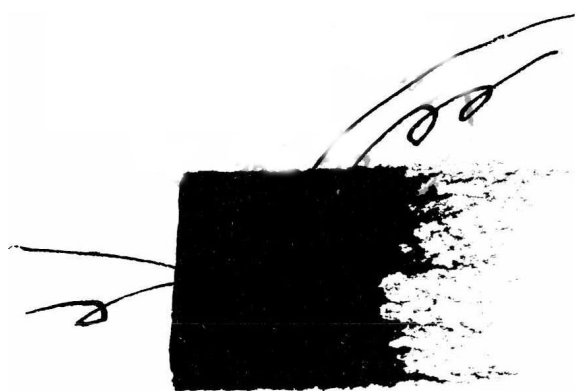


エッセンス・オブ・エッセイ

エッセイスト・クラブ賞受賞作 選文集

上

日本エッセイスト・クラブ編



エッセイスト・クラブ賞受賞作選文集

エッセンス・オブ・エッセイ(上)

昭和五十六年九月九日 第一刷発行

編者 日本エッセイスト・クラブ

発行者 江口克彦

発行所 PHP 研究所

京都市南区西九条北ノ内町二一 郵便番号六〇一

電話 〇七五―六八一―四四三一

東京事務所 〇三―二九五―九二二一

印刷所

図書印刷株式会社

製本所

©1981 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

はしがき

日本エッセイスト・クラブは一九五一年（昭和二十六年）に出来ましたので今年満三十年になります。一方、エッセイスト・クラブ賞はその二年あとから始めたので、今年第二十九回です。そこで、クラブとして何か創立三十年を記念する事業でもやるとなれば、本を出すのがいちばん適当であろう、それにはこれまでの受賞作品をひと通り紹介する選集のようなものを出すのがよからう、ということになりました。

クラブ賞は毎年ふつう三人ずつに出しているのですが、本年度で総計八十六人にも上ります。こんどの出版には受賞者の方々のご同意をいただき、しかも印税はクラブの資金にあてて下さることにしました。八十六人のうち物故十七人の方については、ご遺族の方に連絡をとりました。

どの著者の文章も、ある一部分だけの抜粋であります。八十何人にもなりますと上下二巻に分けざるをえなくなりました。抜粋の個所は、著者の方で選ばれたのが大部分ですが、一部は編者に委されたものもあります。

受賞作品の一覧は巻末に掲げたごとくです。著者の顔ぶれも各方面にわたり、本の内容もバラエティにとんでいます。したがって、この本での並べ方も年次などには拠らず、文字通り順不同にしました。上巻・下巻への振り分けにも、色合いが偏らないようにしましたので、どちらも全

篇を通じて、エッセイの醍醐味を味わっていただけるとおもいます。

付記いたしますと、エッセイスト・クラブ賞の対象は、「前年の五月初めからその年の四月末まで」の一年間に本になったものというワケがあります。そして内容としては「新鮮で感銘を覚えるような作品」を期待するのですが「特に新人のものを歓迎」という基準があります。したがって秀れたエッセイであっても、すでに著名な文筆家のものでは対象になりにくい。しかしエッセイを書くのに年齢、職業などは関係ありませんから、たとい年は七十歳を過ぎた学者、記者、医者、役人、歌人、俳優……その他どんな方のもので、はじめて挑んでみたエッセイなどというのは立派に「新人」です。

審査は十数人の委員でやりますが、委員は当クラブの会員に限っています。うち何人かは毎年入れ替わり、委員長も一年交替です。クラブ会員の著書は対象になりません。

とまれ、三十年にわたって、世間にこういった見事なエッセイをご紹介できましたことは、わたくしどもの心から幸いとするところであります。

一九八一年八月

エッセイスト・クラブ賞受賞作 選文集
エッセンス・オブ・エッセイ

◆ 目次

はしがき

ロバータとの対面

洛中生息

雉子の聲

ペンダントのような言葉

俳句と私

和時計

桜島

貧しい日本人

安重根——義士と暴漢の間

羊飼の食卓

きみ、それでジャガイモができるかね

佐々木たづ 11

杉本秀太郎 16

角川源義 22

三國一朗 28

吉田洋一 32

塚田泰三郎 39

曾宮一念 42

鳥羽欽一郎 47

長坂 覚 53

太田愛人 59

小松恒夫 65

すまいの四季

宝相華の円舞

一日一言

張季鸞と意見を交す

墨いろ

きもの思想

ロッキ―山脈の麓へ

「直接的体験」としてのアメリカ

比較地球論序説

朝霧の町――津山

けむりのゆくえ

人はなぜ胃潰瘍になるか

清水 一 71

林 良 一 77

市川謙一郎 84

松本重治 88

篠田桃紅 94

戸井田道三 100

藤原正彦 107

亀井俊介 114

樋口敬二 121

堀 淳 一 128

早川良一郎 133

島村喜久治 140

ものいわぬ農民

巨匠の贈りもの

名人円喬と浅草本願寺

とび屋の資格

真と贋との間

関西と関東

雪国のノウサギ

お召列車の運転

エジプトの驚異

スイスの矯正施設

1812年の雪

浦上四番崩れ

大牟羅 良

野見山 曉治

関山 和夫

佐貫 亦男

白崎 秀雄

宮本 又次

高橋 喜平

阪田 貞之

村川 堅太郎

団藤 重光

両角 良彦

片岡 弥吉

145

151

156

163

167

172

179

184

187

193

199

203

適応の兆候・ブラジルぼけ

薄田泣菫——恵まれた登場

父の帽子

荷風歓樂

日本の鶯——堀口大學聞書き

ごぜの名を初めてしる

神風特別攻撃隊

斉藤広志

松村 緑

森 茉莉

小門勝二

関 容子

斎藤真一

高峰秀子

210

215

221

225

232

241

246

エッセイスト・クラブ賞受賞作選文集

エッセンス・オブ・エッセイ

ロバータとの対面

佐々木たづ

「芝生に、デッキチェアが用意してあります。さあ、いきましょー」

ミスタ・マルカムは、植込みの間の道を通って、私を庭のほうへ案内して行った。木々の下の、ひんやりした空気の香^かぐわしさも、緑を抜けてくる木^こもれ日も、そして、たわんだ枝さきの葉がやわらかく肩にふれる感触も、すべてが、この、今から迎える大きな期待のひとときへの、静かな祝福の前奏曲をかなでた。土にうもれかけた古い石の段を二つ三つ降りると、そこはもう芝生で、暖かい日射しが満ちていた。ジョージとマックはすでに来ていた。

全員揃ったところで、ミスタ・ターカーは話をはじめられた。

「これから犬と対面するわけですが、きのう、ミスタ・ムーディもいわれたように、当てがわれた犬を、ほかのと比べるのは好ましくありません。主人がそれぞれ異っているように、それに適する犬も、またそれぞれ違うということを、よく理解してほしいと思います。

――まず、ミスタ・ベリーの犬はカーリー・コートッド・リトリバー、メスで生後二十二カ

月、名前は「シェビー」。ミスタ・リードのはアルセイション、メス、生後十八カ月、名前は「ロラ」。たづの犬は、イエロー・ラボラドア種でメス、生後二十カ月、名前は「ロバータ」、アー、オウ、ビー、イー、アール、ティ、エイ、です。つぎに、ミスタ・マックグレガーの犬は……」と説明は続いた。

私は手の平に Roberta と何度も何度も書いてみた。

「いい名前だ。とてもいい名前だ」と私は思った。話し終ったミスタ・ターカーは、「それじゃちょっと待っていて下さい」と言い、「まるで結婚あっせん所といったところですね」と、明るい笑い声を残して去っていかれた。

やがて、戻って来られたミスタ・ターカーと共に、二三匹の犬が芝生を踏んでくるのが分かった。

「さあ、たづ、これがあなたの犬です。名前を呼んで、よく愛撫あいぶして下さい」

渡された革ひもの先を、私は注意深く手もとに引いた。それに応じてロバータは、優しい足どりで近よってきて、私の足もとに、きっちりとすわった。

「ロバータ！ ロバータ！」

私は芝生に腰をおろして、片手をロバータの首にまわし、片手でその全身を愛撫した。それは、くせのない素直な毛なみにおおわれ、その後頭部から背中、そして、しっぽの太いつけ根のあたりは、より密生した深々とした毛なみを持っていた。短い毛におおわれた耳は、優しくたれていた。前額部から目の間を通して鼻にいたる線は、きわだってすっきりと、若い貴婦人の気品

を持ち、深い、そしてわずかにうず巻いた毛におおわれたのどからあごに至る線には、まだ幼い女の子のあどけなさがあって、これらがきっちり締ったかしこそうな口元のあたりで微妙な調和をなしていた。首から胸への毛は、豪華な唐草模様のように中央から左右に流れ、渦巻いて分れていた。

ロバータは、私の愛撫に対して何の抵抗もせず、と同時に、何の応答も示さなかった。ただ、心もち鼻を空のほうへ向けて、じっとすわっていた。おかし難い気品が、その全身からあふれているのを、私は感じないわけにはいかなかった。

「これをほんの少しずつ手にとつて、犬に与えて下さい」と、ミスタ・ターカーが、ひとかたまりの挽肉ひきにくのはいったお皿を渡していかれた。ロバータは健康な食欲を示し、大きな舌を私の手の平に押しつけるようにして、挽肉をなめ取った。

やがてミスタ・ターカーが、犬を集めに来られた。私は革ひもの先をミスタ・ターカーに渡した。ロバータは静かに立上がつてそれに従った。ドクター・ヘーゲルの犬が主人にとびついて、顔をなめ、つづいて私にとびついて一なめし、そして他の犬とともに引かれていった。

私は、おそらくはうすクリーム色であろろうロバータの毛なみが、午後の陽射しのなかに、緑の芝生に映える様子を心にくっきりと描いた。そして私は、この誇り高い犬自身から、「あなたこそ、わたしのご主人です」という表現をさせたい、そして、いつも、それにふさわしい主人でありたいと心に強く願った。

夜は、全員そろってミスタ・ターカーから、「リード」と呼ばれる革ひもと、くさりの首輪の、

犬につけ方・はずし方を習った。このリードだけをおびている場合には、犬に盲導の責任はない。主人は、リードを左手に持ち、「足もとにずっと寄って！」（ヒール・クロース！）と声をかけながら犬を導き、部屋の仕切り、ドアの手前、階段の上がりぎわ・降りぎわに、必ずいったん犬をすわらせる。見知らぬ場所の場合には、主人が、誰かに、「右腕をとって案内してほしい」と依頼する。

つぎに習ったのは、犬に用を足させるため、「ラン」に放すことだった。ランの木戸のきわで犬をすわらせて、リードをはずし、木戸をあけて放すのである。この場合、ランにはすでに、誰かが犬を放してあることもあり得るので、木戸のあけたては、非常に用心深くおこなう。木戸の横木には、生徒それぞれに割当てである六本の釘くぎが打っており、はずしたリードをここの釘にかけて置いて、あとからきた人に、犬がそこに放してあることを示す。

ミスタ・ターカーは、それぞれの部屋までついていって、犬をベッドへ入れるやり方を教えられた。ミスタ・ターカーが部屋を出ていかれ、ロバータとだけ後に残されると、私は、望みに望んだ犬が、いま自分の身近にいるよるこびと、この貴重ないのちの保護が、いま自分に委ねられているという責任で、体が堅くなるのを覚えた。

私は両親あての手紙をタイプで打ちはじめた。

八月五日。午後、盲導犬をいただきました。名前は「ロバータ」といって、……

ロバータは、ベッドから降りてきて、タイプを打つ私の手もとをしばらくのぞき込んでいたが、ゆっくりベッドへ戻ると、まもなく安らかな寝息を立てはじめた。